

〔共同研究：大学教育における南近畿の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究〕

日本仏教の揺籃の地としての南大阪（四）

梅 山 秀 幸

一、2015年 パリ

2007年度および2015年度、どちらも一年間、私はフランスで研修生活を送った。研修先はパリのコレージュ・ド・フランス。このコレージュはイタリアのパヴィアでスペイン軍と戦って捕虜となったフランソワ I 世（1494～1547 在位1515～没年）が、イタリア・ルネサンスに目を開かされ、その多大な影響を受けて1530年に作った王立教授陣（lecteurs royaux）を起源として、カトリック神学の牙城であるソルボンヌでは許されないヘブライ語、ギリシア語、そして数学などの学問への道を開き、「すべてを教える docet omnia」をモットーに掲げる。私は5区のカーディナル・ルモワンにある東洋部の建物に研究室を与えられたのだが、その建物には中近東の考古学者も、ヘブライの研究者もイスラームの研究者も同居していた。中国の、韓国の、チベットの研究者とも昼食時にはいっしょになった。刺激の多い充実した研究三昧の生活を送ることができる環境であったが、建物の五階の研究室からは中庭が見下ろせ、その中庭に面した一階にレヴィ＝ストロースの研究室が、2007年度にはもう彼が元気な姿を見せることはなかったものの、彼が使用していたときそのままに残されていた（レヴィ＝ストロースが百歳で亡くなったのは2009年のことである）。

2015年度の滞在では、ミシェル・ジंक教授の中世フランス文学の講義を聴講し、ダニエル・ストループ教授、アヌーク・ホリウチ教授らの木村兼葭堂の『山海名産図会』の共同研究に参加しながら、はたから見るとおかしいことをと思われるかもしれないが、『溪西野譚』・『青邱野譚』など朝鮮の両班たちの文学の翻訳に没頭した。翻訳の参考として必要な中国の四書五経も朝鮮王朝実録も、そして日本の古典文学大系も書棚に手を伸ばすだけでよく、必要な文献があれば、司書の方に頼めばいい、日本のどの図書館にもない恵まれた研究環境であった。その仕事の合間には、グレゴワール・ド・トゥールの『フランク史』のフランス語訳、そしてジャック・ル・ゴフの『聖王ルイ』の大部の書物を読んで過ごした。

そうして秋が深まり、11月13日（金）、パリは同時多発テロに見舞われた。

キーワード：2015年パリ、オランダの追悼演説、クロヴィス、グレゴワール・ド・トゥール、『フランク史』

その夜、ドイツとフランスのサッカー試合がサン・ドニのスタジアムで行われていて、そのテレビ中継を見ていたところ、途中でどうも様子がおかしい。すぐには何が起こったのかはわからなかったものの、異常事態が発生したことだけはわかった。サン・ドニのスタジアムの側で爆発があって3名ほどの死者が出たのだった。さらに大勢の死傷者を出したのはレパブリック広場界限であり、ロックの公演をやっていたバタ克蘭劇場では100名近くの死傷者があり、警官もまた4名が死亡した。カンボジア料理のレストランで、またカーザ・ノストラというイタリア名をもったレストランでも20名以上の死傷者があった。

その夜中じゅう、パリの空はヘリコプターが飛び交って寝付けなかったのを思い出す。その日を境に市民生活はさまざまな場面で一変した。町中どこでも、三人で一組になった警官、ジャンダルム（憲兵）たちが巡回する姿を見かけるようになったし、警察犬、あるいは軍用犬が地下鉄にまで乗って来た。私など豚肉は食べるし、ワインは飲むし、また醤油の匂いもしたろうから、私の匂いを嗅いだ犬は怪訝そうな顔をしてすぐに顔を背けた。愛玩犬、そしてせいぜい猟犬の観念しかなかった犬が実は軍事においても大きな役割を果たしていることに気づかされたことはちょっとした収穫ではあったのだが。博物館ではいままでにまして入念な身体チェックが行われるようになったし、それはデパートでまで行われるようになった。エッフェル塔の夜間照明は二、三日なされず、その後、フランス国旗のトリコロールに染まった。

11月16日（月）の正午前、コレージュ・ド・フランスの研究室からはノートルダム大聖堂で打ち鳴らされる鐘の音が聞こえ、それを合図に館内にいた研究者、職員全員が一斉に中庭に降りた。私も誘われて降りたが、正午、金曜日の死者たちのために一分間の黙祷を全員でささげた。それはフランス全土で行われたのだと思われる。私と研究室を共有していた図書館司書の海外県グアドループ出身の女性が涙を流していたのが印象的だった。

そして、事件があって2週間後の11月27日（金）、ひと足はやく冬が来たといってよい厳しい寒さの日、アンヴァリッドで、13日の被害者のための、被害者の遺族および救援活動に当たった警察や消防隊の人びとを招いての追悼集会が厳かに執り行われた。三人の女性歌手の「私たちが愛しかもたないとき（Quand on n'a que l'amour）」というシャンソンの絶唱が今も耳に残っている。そのとき、オランド大統領は次のような追悼の演説を行った¹⁾。

「11月13日の金曜日、その日を私たちは決して忘れません。遠方で冷酷に組織された戦争行為の中で、フランスは卑劣にも攻撃を受けました。殺人者の一団は、ばかげた理由と間違った神の名の下で、130名の命を奪い、何百もの人を傷つけました。

今日、すべての国民が犠牲者に涙を注ぎます。130の名前、130の奪われた命、130の中断された運命、130のもう聞くことのできなくなった笑い声、130の沈黙することになった声。

1) <Discours de François Hollande lors de l'hommage national aux victimes des attentas du 13 novembre>
www.youtube.com/watch?v=lqTfAsilCFc

その女性たち、その男性たちは生きる幸福を体現していました。彼らは生命そのものであったからこそ、殺されたのです。彼らはフランスそのものであったからこそ、打ち倒されたのです。彼らは自由そのものであったからこそ、虐殺されたのです。

この国家が一体となった暗鬱で悲痛な今、私は国家の名で、私たちの同情、私たちの愛情、私たちの衷情を、共有する不幸の中で、ここに集まられた家族および親族の方々にささげます。もうその子を見ることなくなったご両親たち、もうその親を見ることなく育つ子どもたち、愛する人を失って壊されたカップル、永遠に引き裂かれた兄弟姉妹。そして、130人の死者と、これからずっと肉体に影響を受け、心にトラウマを持ち続ける大勢の負傷者たち、そのすべてにです。

そして今、私はただ次のことばをいいます。フランスはあなた方に寄り添います。私たちは力を結集して、哀しみを慰藉し、死者を埋葬した後、生き延びた方たちが回復することに力を尽くします。

あなた方すべてに厳粛に約束します。フランスはこの罪を犯した狂信者の軍隊を破壊することに全力を挙げることを、そして国民を守るためには怠ることなく活動することを。さらにまた約束します。フランスはフランスのままであることを。それは亡くなった方たちが愛した姿であり、フランスが留まることを望まれたであろう姿でもあるはずです。もし今日、私たちがよって立つ理由、私たちの原則を守るために戦う理由、私たちの共通の善であるこの共和国を守るべき理由、そうした理由が必要であるとしたら、私たちはそれを彼らの思い出の中に見出します」

演説はさらに続き、20分ほどのものであったろうか。演説の草稿はオランダ大統領自身が作成したものだといい、日本の為政者には望むべくもない格調の高さを感じさせるものであった。これは「弔辞」であり、またISに対する「宣戦」も兼ねていることになるが、フランスの国家の現在のあり方、ありうべき姿が異国の者には明瞭に示されていて、興味深いものであった。また、この式典がアンヴァリッドで行われ、ノートルダムで行われたのではないことも、当然ではあるが、留意しておく必要がある。もういつのことか記憶が薄れているのだが、「赤い旅団 Le brigade rosso」の終末期ではなかったか、ミラノでテロがあって警官が殉職したとき、その追悼式典がドゥオーモ（大聖堂）で行われたのをテレビ中継で見たのを覚えている。イタリアとはまた事情が違って、フランスにおいて *laïcité*（政教分離）は徹底されなければならないであろう。そして、「どのような条件（condition）の人であれ、どのような宗教（confession）の人であれ、またどのような出自（origines）の人であれ」、いまは「フランス人」なのであり、11月13日の犠牲者の中にはムスリムだったはずなのである。オランダはことばを変えて、このことを何度も強調する。「私たちの差異（*différences*）、出自（*origines*）、体の色（*couleurs*）、信念（*convictions*）、信仰（*croyances*）、宗派（*confessions*）などにこだわることなく。なぜなら、私たちは同じ価値観をもつ単一の、

そして同一の国民だからです」。そういえば、式典の間、オランダの後ろに控えて座っていた閣僚たちも肌の色はさまざまであり、出自もさまざまであった。日本と違って（これは強調しておいていい）、モロッコからの移民でも、中国系の移民でも、韓国系の移民でもフランスの閣僚になれるし、さらにいえば、半数の閣僚は女性であった……そしてまた、問題を難しくすることでもあるが、テロリストたちもまた、出自はモロッコであっても、チュニジアであっても、国籍はあくまでもフランスなのである。「同一の国民」ではあっても、「同じ価値観」をもつとはいえないことになるのだが。

オランダ大統領の追悼演説は次のように締めくくられていた。

「11月13日のアタックは世界の持続にとって恐ろしい通過儀礼として今日の青年の記憶に残りましょう。しかしまた、それは新たな参加を工夫して、それに対峙することへのうながしでもあるのです。私は若い世代が私たちの手渡す松明をしっかりと握りしめることを知っています。

私は確信します。彼らが私たちの国家の未来をしっかりと握りしめる勇気を持っていることを。11月13日の犠牲者に訪れた不幸は青年たちにその偉大で尊い義務を授けたのです。自由は復讐されることを求めず。奉仕されることを求めます。私は新しい世代に敬意を表します。その世代は攻撃されましたが、しかし、今、私たちが喪に服している無垢の犠牲者と同じく、恐れを知らず、明敏かつ活動的です。私は確信しています。彼らは偉大さを証明する術を知っていることを。彼らは生きる、今日、私たちが涙を流す死者たちの名において、十分に生きることでしょう。

流す涙にもかかわらず、今日のその世代がフランスの顔なのです。

共和国、万歳！ フランス、万歳！」

フランスの *laïcité* に至る過程には、中世のカトリック教会の支配、プロテスタントの台頭による熾烈な宗教戦争、聖バートルミーの虐殺、ナントの勅令、フランス革命、近々の植民地支配、ヴィシー政権のナチへの加担その他に、多くの紙面を割く必要があるであろう。しかし、それは私の任ではなく、今の課題でもない。フランスがカトリックの国になった淵源が、日本の聖徳太子の時代の仏教受容を考える上で参考になり、日本に「文明 *civilisation*」なるものがあるとして、その様相を知る手がかりにしたいというだけのことである。

11月13日のしばらく後であったが、コレージュ・ド・フランスの中庭が掘り返された。翌年度から、建物を改築するので、遺構を調査するということであったが、実は中庭をフィリップ・オーギュスト（1165～1223 在位1185～没年）が建てた城壁が昔は突っ切っていたはずなので、それを調べるということであった（写真1）。はかばかしい発掘の成果はえられなかったらしく、すぐに埋め立てられたが、建物に隣り合っているクロヴィス通りにはフィリップ・オーギュストの城壁が露出したまま保存されている箇所がある（写真2）。



(写真1 コレージュド・フランスの中庭の調査発掘)



(写真2 クロヴィス通りのフィリップ・オーギュスト時代の城壁)

セーヌ右岸のマレー地区にもフィリップ・オーギュストの城壁の名残があるが、中世のパリ市内というのはいかにも狭いものであり、サント・ジュヌヴィエーブの丘の上方をやっと取り囲むくらいでしかなく、ムフタル街もその境界にあったことになる。



(写真3 右がアンリIV世校、クロヴィスが建てた聖使徒教会であり、後に聖ジュヌヴィエーヴ修道院となり、今は有数の進学校。クロヴィスの塔が見える。左は聖エチエンヌ教会)

クロヴィス通りを上っていくと、パンテオンがあるが、その前のところでクロチルド通りと交差する。またその地点を目指して、セーヌ河岸の方から登って来る道があり、それは聖ジュヌヴィエーヴ通りということになる。そこには今、聖エチエンヌ教会があり、それと隣り合って、アンリIVという名門のリセがある(写真3)。その校舎はかつてのサント・ジュヌヴィエーヴ修道院であった。クロヴィス自身が造り、当初は聖ペテロと聖パウロのための教会であったものを、聖ジュヌヴィエーヴ修道院と名を改め、フランス革命以前は聖ジュヌヴィエーヴ、クロヴィス、そしてその妻のクロティルドの墓があった。クロヴィスの塔といわれる塔が今もそのリセの中に立っている。フランス・カトリック草創期のビッグ・ネームがそろった。この界限は彼らにゆかりの深い場所であるために、地名として、通りの名として残っているのである。歴史が地名として、通りの名として刻み付けられる。聖ジュヌヴィエーヴはセーヌ河畔からいつも聖ジュヌヴィエーヴ通りを通して丘の上にお祈りに来ていたというのである。

二、最初の司教たち

ロワール川に沿ったトゥールという町がある。高校生のときにならった世界史で、シャルル・マルテルがサラセン軍と戦って撃退したツール・ボワチエの戦いによって、記憶に残っている名前である。バルザックの故郷でもあり、多くの作品の舞台にもなっている。その司教であったグレゴワール(538, 9~594)の『フランク史』をひもとき、その叙述をたどってみたい。フランスにおけるキリスト教の歴史について論じようという大それた意図はなく、聖徳太子の仏教受容に百年ほど先立つクロヴィスのカトリック入信のありようを見る

ことによって、日本の仏教受容の意味を考える手立てとするためである。

キリスト教そのものはクロヴィス以前のガリア地方にすでに伝わっていた。グレゴワールは次のように語っている。

「そのころ、殉教者サチュルナンの受難史が語るところによると、七人の人が司教に選ばれ、伝道のためにガリアに派遣されたのであった。受難史は次のように語る。

『デキウスとグラトゥスが執政官のとき、確かな記憶として、トゥールーズの町はその最初の際立った司教として聖サチュルナンを受け取った』

以下の人びとがガリアに派遣されたのである。トゥールにはガティアン司教、アルルにはトロフィーム司教、ナルボンヌにはポール司教、トゥールーズにはサチュルナン司教、パリにはドニ司教、クレルモンにはオーストルモワヌ司教、そしてリモージュにはマルシアルがそれぞれ司教として赴任したのである。これらの中で福者のドニはキリストの名のもとにさまざまな拷問に堪え、遂に刀刃によってこの世の生を終えたのであった。

サチュルヌについていえば、殉教することが確かになって、司祭たち二人にいった。

『私は今、命を失い、神に召されるときが近づいた。わたしの終わりがあるべき姿で完成されるまでは、あなた方は私を見捨てないでほしい』

サチュルヌが捕まり、キャピトル（ジュピターの神殿の丘）に連れられて行くことになって、司祭たちは彼を見捨てて逃げた。サチュルヌは一人で連れ去られて行った。司祭たちが見捨てたことを知って、彼は次の祈りをしたと伝えられている。

『主イエスよ、聖なる高みから私の願いを聞いてください。あの教会は将来にわたって決して住民たちから選ばれた司教をもたぬように』

今に至るまでその町ではそうになっている。サチュルヌはキャピトルの丘からいきり立って駆け下りる牡牛につながれて落とされ、そのようにして命を終えた。

ガティアン、トロフィーム、オーストルモワヌ、そしてポールとマルシアルは、高い聖性につつまれて行き、人びとの教会において成功し、キリストの信仰をいたるところに広めた』²⁾

一般的に、ローマは都市文明の国家であり、ローマ帝国が世界に広め普及させた文明は都市中心主義にならざるをえなかったとされる。ガリア地方にはローマ以前にケルト族が部族単位で集落をつくって民会を開いて治めていたようだが（カエサルやタキトゥスはそれを *civitas* キヴィータスと呼んだ）、そこにローマから商人、事業家、兵士たちが植民して来て、植民都市ができる。ケルト人とローマ人は時間はかかったろうが、混交していく。そこにローマ教会は伝道者を派遣したということになる。トゥール、アルル、ナルボンヌ、トゥー

2) Grégoire de Tours, *Histoire des Francs*, traduite du latin par Robert Latouche, LES BELLES LETTRES, Paris 1996 pp 54-55 以下、『フランク史』についてはこの書物により、筆者が日本語に翻訳する）

ルーズ、パリ、クレルモン、リエージュ、いずれも今に残る都市の大聖堂の司教たちは重要であるが、ここではパリの初代の司教のドニについて見てみたい。ウォラギネの『黄金伝説』の中の聖ディオニュシウス（ドニ）伝は、使徒パウロによって改心してアテネの初代司教になったというディオニュシウス・アレオパギタと初代パリ司教のディオニュシウスとを同一視して書かれているとされる。パリ司教としての部分だけを次に引用してみる。

「そのあとクレメンスがローマ教皇になると、聖クレメンスは、しばらくしてからディオニュシウスをフランスに派遣し、ルスティクスとエレウテリウスを彼に同行させた。彼は、こうしてパリに着くと、多くの人びとをキリスト教に改宗させ、たくさんの教会を建て、さまざまな品級の聖職者たちを叙品した。神の恩寵の光が彼の五体からかがやいていることは、だれの眼にもはっきりとわかった。これはなんどかあったことだが、偽神の祭官たちは、民衆をそそのかして彼に反乱を起こさせ、大挙して武器を手に押しよせてきたまではよかったが、彼の顔を見るやいなや、だれもみな牙を抜かれたようにおとなしくなり、彼の足もとにひざまずくか、怖ろしくなって一目散に逃げだすのがおちであった。

こうしてキリスト教の信者がふえ、悪魔の領分が日一日と狭くなって、教会が凱歌を奏するのを見て、悪魔は、ものすごい嫉妬にかられた。そこで、皇帝ドミティアヌスの胸に憤怒の炎を焚きつけ、キリスト教徒を見つけしだい力づくで神々に供香させ、それでも応じなければきびしい拷問にかけて殺してしまえという命令を出させた。こうして長官フェスケニヌスがキリスト教徒掃討のためにローマから派遣された。フェスケニヌスは、人びとに教を説いているディオニュシウスを見つけるや、すぐさま捕らえて、拳でめった打ちさせた。ディオニュシウスは、顔につばを吐きかけられ、さんざんあざけられたうえ、丈夫な皮ひもでしばりあげられ、ルスティクスおよびエレウテリウスの両聖人ともども長官のまえに引きだされた。聖人たちは、毅然としてキリストに対する信仰を告白してはばからなかった。と、そのとき、ひとりの身分の高い婦人がすすみ出て、わたしの良人ルビウスはこのけしからぬ魔術師どもに誘惑されたのです、と訴えた。彼女の良人は、すぐに逮捕されたが、すこしも屈しないで信仰を守りつづけたので、不法にもその場で処刑された。聖人たちは、十二人の兵士たちに笞で打たれたあと、重たい鎖でしばられ、牢に入れられた。つぎの日、ディオニュシウスは、鉄の火格子のうえに裸で寝かされ、その下には火が炎々と燃えさかっていた。彼は、主をたたえて、『あなたの約束は、まことに確かです。あなたのしもべは、これを受けます』（『詩篇』119ノ140）とうたった。つぎに、人びとは、彼を火のなかから引きずりだして、長いあいだ餌を与えないで飢えさせておいた猛獣どものまえに投げあたえた。獣どもは、猛然とおそいかろうとしたが、聖人が彼らにむかって十字を切ると、たちまちおとなしく、静かになった。こんどは、大きな炉のなかに投げこまれたが、火はすぐに消えて、火傷もしなかった。そのつぎは、十字架に打ちつけられ、長いあいだ大きな苦しみを受けた。やがて十字架から下ろされ仲間の聖人たちや多くの信者たちといっしょに牢に寝かされた。

彼は、それでも立って、信者たちのためにミサをあげ、聖体をさずけようとしたとき、主イエスが無量の光とともにあらわれ、パンを手にもって、こう言われた。『わたしの愛子よ、これを受けなさい。あなたが受ける最大の報酬は、わたしのもとにあるのですから』。このあと聖人たちは、長官のまえに引きだされ、あらたな拷問をくわえられたのち、メルクリウスの柱像のそばで至聖三位一体にたいする信仰を告白しながら三人そろって斧で首を落とされた。聖ディオニシウスの首のないからだは、すくくと立ちあがって、自分の首を両手にかかえ、ひとりの天使にみちびかれ、天上の光につつまれて三マイルの道のりを歩いていった。今日「殉教の丘」とよばれているところから彼がみずから選び、神の思召しによっていまも永遠に安らっている場所まで歩いていったのである」³⁾

殉教者たちの受けたさまざまの拷問と、それに屈しなかった強い信仰心が語られる。ドニはモン・マルトルで首を斬られ、みずからその首を両手に抱えて、今のサン・ドニまで歩いて行ったというのである。無残にも去年五月の火災で焼け落ちてしまったが、初めてパリを訪れ、ノートルダムの大聖堂を見上げ、足を運んでファサードに近づいてゆく。左手の処女マリアのポルターユにコンスタンティヌス帝の彫像があり、天使を挟んで、首がなく、そしてその自分の首を胸の前に抱えている聖人像があるのを見て、いぶかしう思う経験をした人は多いであろう。それがサン・ドニだということになる。通りの名についてもいえば、サン・ドニ通りというのは、ドニがパリ市内から今は観光名所である、文字通り殉教の丘であるモン・マルトルに向かう道筋だったということになる。

さらに北方の、サン・ドニが自分の首を抱いて歩き続けて落ち着いたというサン・ドニの町にはサン・ドニ教会があり、フランス王の霊廟という位置づけになっている。しかし、サン・ドニ教会に王たちの墓を集め、メロヴィング家からカロリング家、さらにカペー家を「万世一系」として連ねるイデオロギーは、ルイ九世、すなわちサン・ルイの時代からのものであると、ジャック・ル・ゴフは指摘している⁴⁾。このサン・ドニの町の中でいま一際大きく目立つのはサッカー競技場のスタード・ド・フランスであり、それは11月13日のアタンタの対象にもなったわけだが、初代パリ司教の墓所であり、またフランス王家霊廟の町が今やアフリカからの移民の町にもなっている。日曜日のマルシェはごった返し、そこで売られる日用品や食料品はパリ市内に比べれば安価で、大変に重宝したものであったが、11月13日のアタンタの首謀者たちのアジトも移民たちのコミュニティを形成しているこの町にあって、五日後の18日には、警察が踏み込んで首謀者たちを射殺したニュースが伝えられた（写真4）。

サン・ドニはパリの初代司教ということになるが、フランス語に *suffragant(e)* という形容詞がある。司教が（大）司教に従属する、という意味でつかわれる。それが名詞として使

3) 前田敬作・山中知子訳『黄金伝説4』人文書院, 1988, pp. 86-88

4) Jacques Le Goff, *Saint Louis*, Gallimard, 1996, p. 338



(写真4 聖ドニ教会と日曜日のマルシェ)

われる場合は「従属司教」という意味になる。たとえば、次のように使われる。

À la fin du IV^e siècle, l'organisation de l'Église, calculée sur celle des provinces romaines, fait de l'évêque de Paris un suffragant de l'évêque métropolitain de Sens⁵⁾.

(4世紀末において、教会の組織は、ローマの地方行政の組織にのっとって、パリの司教を首都のサンスの司教の従属司教とした)

ローマの行政組織そのままにカトリックの教会組織も作られたので、パリはサンスに従属し、パリの司教はサンスの司教の下位にあったということになる。人口において、その規模において、そして首都機能において、中世のパリとサンスは比較にならないにもかかわらず、パリには司教(évêque)がいて、サンスの大司教(archevêque)に従属していた。フィリップ・オーギュストも、サン・ルイもパリに自分以上の権威がいることを欲しなかったということになるのであろう。ルイ XIII 世治下の1622年、ジャン・フランソワ・ド・ゴンディが初めてパリ大司教に任じられることになる。

この当時の聖人をもう一人挙げてみる。ハンガリーから来たサン・マルタンである。この人は先の二人と違って殉教者ではない。『フランク史』では次のように語る。

「そして私たちの光が現れ、新たな輝かしい光線がガリアを照らした。それははなはだ幸いなるマルタンがガリアで神の教えを説き始めたのである。彼は人びとにさまざまな奇跡を通して、神の子キリストは真実の神であることを明らかにし、異教徒たちの不信を減少させたのである。彼はまた異教徒の祭壇を壊し、異教を窒息させ、教会を建て、それと同時に、他の多くの奇跡によって名を現し、三人の死者を蘇らせて、栄光の名をほしいままにした」⁶⁾

5) Jean Fabier, *Paris*, Fayard, 1997, p. 390

6) 前掲 *Histoire des Francs*, p. 61

その死者を蘇らせた話というのは『黄金伝説』では次のようなものである。

「あるとき、しばらく旅に出て修道院に帰ってくると、留守のあいだにひとりの洗礼志願者が、洗礼を受けないまま死んでいた。そこで聖マルティネスは、遺体を庵室にはこび、そのうえにかがみこんで一心に祈り、死者をよみがえらせた。この人がつねづね話していたところによると、彼は、すでに審判を受け、どこか暗い場所に送りこまれたが、そのときふたりの天使が裁き主にむかって、「マルティヌスが祈っているのは、この者のためでございます」と申しあげた。すると、裁き主は、彼をよみがえらせて、マルティヌスのもとにつれもどすようにと天使たちにお命じになったということである。聖マルティヌスは、首を吊って死んだもうひとりべつの人物をもよみがえらせた」⁷⁾

これで二人である。そしてもう一人、

「ある若者が死んだ。その母親は、どうか息子にもう一度命をあたえてやってください、と涙ながらに聖マルティヌスにたのんだ。聖人は、数えきれないほど大勢の異教徒たちが集まっている野原のまんなかでひざまずいて、祈りはじめた。すると、若者は、みんなの見ているまえてよみがえった。これを目撃した異教徒たちは、みんな回心してキリスト教を信じるようになった」⁸⁾

『黄金伝説』の「司教聖マルティネス伝」は他よりも分量が多く、彼の生涯を丁寧にたどることができるが、まだ聖職にいる前の軍人時代の話として、次のような話も載せる。

「ある冬の日のこと、彼が馬でアミアンの市門を通りぬけていこうとしたとき、ひとりのはだかのおもらいに出会った。だれひとりとして施しをめぐむ人はなかった。マルティヌスは、この男は自分に助けられるように定められているのだとさとして、ほかに施すものがなかったの、剣を抜いて、着ていたマントをふたつに切り、ひとなどつを貧しい男にあたえ、残りの半分を自分が着た。その夜、彼が貧しい男に着せかけてやった半分のマントをまとったキリストが、彼の夢枕に立たれた。」⁹⁾

死者に衣服を施し、復活させる、聖マルタンエピソードは似通った日本の話を思い出させる。『日本書紀』推古二十一年に載せる話である。

「^し ^は ^す ^{かのえうま} ^{ついたちのひ} ^{ひつぎのみこ} ^い ^{うゑたるひと} ^{ほとり} ^{こや} ^よ
「十二月の庚午の朔に、皇太子、片岡に遊行です。時に飢者、道の垂に臥せり。仍

7) 前掲『黄金伝説 4』pp. 223-224

8) 同上 pp. 225-226

9) 同上 p. 221

りて姓名を問ひたまふ。而るに言さず。皇太子、視して飲食与へたまふ。即ち衣裳を脱きたまひて、飢者に覆ひて言はく、「安に臥せれ」とのたまふ。則ち歌ひて曰はく、

しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ 親無しに 汝生りけめや さ
す竹の 君はや無き 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ

とのたまふ。辛 未に、皇太子、使を遣して飢者を視しめたまふ。使者、還り来て曰さく、「飢者、既に死にぬ」とまうす。爰に皇太子、大きに悲びたまふ。則ち因りて当の処に葬め埋ましむ。墓固封む。数日之後、皇太子、近く習る者を召して、謂りて曰はく、『先の日に道に伏して飢者、其れ凡人に非じ。必ず真人ならむ』とのたまひて、使を遣して視しむ。是に、使者、還り来て曰さく、『墓所に到りて視れば、封め埋みしところ動かず。乃ち開きて見れば、屍骨既に空しくなりたり。唯衣服をのみ量みて棺の上に置けり』とまうす。是に、皇太子、復使者を返して、其の衣を取らしめたまふ。常の如く且 服る。時の人、大きに異びて曰はく、「聖の聖を知ること、其れ実なるかな」といひて、逾 惶る¹⁰⁾

病を治癒する、死者を蘇らせる。hagiographie（聖者伝承）というのは聖者の生涯を語り、聖者の聖者たるゆえんである彼の起こした奇跡の数々を語るものとすれば、極めて似通ったものとなるのも確かである。ちょうど、私が滞在していた2015年の9月25日、26日の二日間、コレージュ・ド・フランスでは「聖人信仰と聖者伝文学、調和と不調和 Culte des saints et littérature hagiographique. Accords et désaccords」と題してシンポジウムが行われた。「偽書について」、「信仰と奇跡の収集」、「疑わしい聖者たち」、「文学と真実の姿のあいだ」などのセッションに分かれて、ギリシア語の資料など、私は解さなかったものの、興味深い発表が数多くあった。物語や伝承の分析は、ウラディミール・プロップあるいはレヴィ＝ストロース以後であり、軽々に影響や伝播を問題にするわけにはいかないようである。しかし、サン・マルタン伝承と聖徳太子伝承のあいだの類似には偶然では片づけられないものがありそうな印象をもつ。中世、サン・マルタンの信仰が庶民のあいだに広がったというのが、「太子信仰」もやはり庶民のあいだの信仰であった。

また、『黄金伝説』の「司教聖マルティネス」は次のようなエピソードも語る。

「フランスの国王は、戦争に出かけるときにはいつでも聖マルティヌスのカップをたずさえていくならわしであった。それで、カップを守護する者という意味でカペラヌと呼ばれたともいう¹¹⁾

Cappaはポルトガル語から入って日本語にもなったが、頭巾つきのマントをいう。マルティヌスがアミアンではだかの乞食に与えたマント（カップ）は聖遺物として保存され、フ

10) 『日本書紀下』日本古典文学大系 岩波書店 pp. 198-200

11) 前掲『黄金伝説4』p. 236

ランス国王は戦争に出陣するさい、この聖遺物のカッパを携行した。そのためにカペラヌス（capellanus）と呼ばれたということになる。フランス語の chapelain と英語の chaplain の語源であり、施設付きの司祭を今はいう。私の勤める大学にもいるが、アメリカ軍などにいるのを知って驚いたことがある。しかし、軍にいるのが本来の姿であることになる。

三、クロヴィス

さて、グレゴワールの『フランク史』からクロヴィスの事績をたどってみたい。

「キルデリックスが死に、その子のクロヴィスが彼に代わってフランク人を治めた。その統治の5年目、エギディウスの子のローマ人の王シアグリウスが父と同じくソワソンに拠点構えていた」¹²⁾

クロヴィスが父の後を継いだのは581年、まだ十五歳に過ぎなかった。ここでいう「ローマ人の王」というのはローマの軍司令官のことであり、その拠点がソワソンにあったことになる。クロヴィスはこのシアグリウスと戦って破り、シアグリウスはトゥールーズに拠点を置く西ゴートのアラリックのもとに逃げる。しかし、アラリックはフランク族と事を構えるのを嫌って、シアグリウスを引き渡したので、クロヴィスはこれを引き取ると、その領土をわがものにした後、これを殺した。

フランクの王の髪の毛は長い。グレゴワールの『フランク史』にもその言及があるが、サン・ドニに安置されているお棺の上の彫像は後の製作であり、リアリズムにのっとった作品ではないにしても、王のありうべき姿を現しているのであろう。クロヴィスの髪の毛は肩まで垂れている（写真5）。中国において、漢字の「長」は、髪の毛を伸ばした一族を主導する老人の姿をかたどった象形文字だという。「髪」という字そのものにも「長」が左上にある。古代中国において、部族の酋は長髪の老人だったことになる。フランクの王家の男たちは老若にかかわらず、髪の毛を伸ばしていて、それが王族の印となる。遺棄された遺体の長い髪の毛でもって王族であることを認定した話や、王位継承権を剥奪する意味合いで断髪させられる王子の話などが『フランク史』にはある。髪の毛に呪力があったということであろうか。女性についていえば、日本の「髪長姫」伝承、あるいは『トリスタンとイゾー』伝承の、イゾーの髪の毛のモチーフから、その長い髪の毛に呪力があったことを指摘することができようし、柳田国男も女性の髪の毛の呪性については随所で述べている。

さて、そのころのフランク族の戦士たちの風儀とはどのようなものだったのか。

「そのころ、多くの教会がクロヴィスの兵士たちによって略奪された。というのも、クロ

12) 前掲 *Histoire des Francs*, pp. 114–115



(写真5 棺上のクロヴィスの横臥像)

ヴィスはまだ狂信の過ちに陥っていたからである。兵士たちはある教会から、儀式に使われる他の器物とともにとりわけ大きく美しい壺を持ち出した。その教会の司教は王のもとに使者を送り、他の聖器はともかくとして、少なくともその壺だけは返してもらいたいと頼んだ」¹³⁾

戦争とは略奪であった。様々な戦争の原因があり、もっともらしい大義を掲げることがあったとしても、常におぞましい略奪行為をとまなう。そして敵方の男は殺害し、女には暴行を加えるものであったろう。まだカトリックを信奉していない蛮族は特に教会をねらう。というのも、教会には富が集積されていて、価値のある金銀の器物を多く所持していたのであろう。クロヴィス自身はこの司教の依頼を受け、略奪品を分配することになっているソワソンまでついてくるようにいう。そこで、運よくその美しい壺が自分のものになったら、司教の頼みを受け容れようというのである。ソワソンに着き、略奪品が積み上げられ、クロヴィスは、その壺については自分が欲しいと、戦士たちにいう。みな王の思い通りにすればいいと答えたが、ただ一人が大声をあげ、「みながまっとうな取り分しか手にしてはいけない」といって、斧を持ち上げ、壺に振り下ろした。クロヴィスはその場では平静を装ったものの、年が改まり、武器の整備を検査するために全兵士たちを武装させて行進させたとき、すべての兵士たちを検閲しながら、王はあの壺を打ちすえた者に近づき、「お前の武器のように手入れをしていない武器は誰も持ってはいない。槍も矛も斧もさ錆びついているではないか」といって、その男の斧を取り上げて、地面に投げ捨てた。その兵士がそれを取り上げようと身をかがめたとき、王は腕を振り上げて自分の斧を兵士の頭に振り下ろす。

13) 同上 p. 115

この時点のフランク族において、王も兵士の一団の中であって、特別な存在ではなく、分捕り品の分配は公平に行われるべきだという意識が生きていたことが注目される。しかし、王に対する畏怖を植え付け、王は特別なものだという意識の改革を行ったのはクロヴィスその人の猛々しい暴力だったともいえる。

四、クロヴィスの結婚 クロチルド

モンテスキューの『法の精神』によれば、一夫一婦制はキリスト教以前からのゲルマン諸族の特徴であつたらしい。もちろん、放逸はある。クロヴィスにはすでに一人の女性とのあいだにティエリーという息子がいたが、新たな結婚相手としてブルゴンドの王女のクロティルドを迎えることになる。この女性の感化がフランス史に大きな変化をもたらすことになる。

クロティルドは最初の子どもを身ごもり、その子を洗礼によって聖別したいと思って、夫のクロヴィスを熱心に説得する。

「あなたが信仰をささげているのは神といえるものではありません。それらはそれら自身にとっても、そして他の者にとっても、救いとはまったくなりえないものです。それらは実際、石に、あるいは木に、そして金属などに彫り込まれたものに過ぎません。あなたがそれらに与えている名前も人の名前であり、神々の名前ではありません。サチュルヌというのは、人が言うには、自分の息子に王国を奪われないために逃げ回っているというではありませんか。ジュピターはといえば、強姦まがいの恥ずかしいことばかり、人びとを凌辱し、親たちを嘲弄し、自分自身の妹と寝るのをやめません。彼女はジュピターの妹でありながら、妻であるという憂き目を避けることができなかったのです。マルスとメルキュールになにができるというのですか。彼らは神の名を負うべき力の持ち主であるよりは、ただ呪術の方法に通じているというだけではありませんか。私たちが礼拝をささげなくてはならない対照が他にあります。その方は、一言でいえば、何もないところから天を造り、地を造り、海を造り、そしてそれらすべてを包み込むものを造られた。そして太陽を燃やし、夜空の星を輝かせ、水を爬虫類で、大地を動物で、空を鳥たちで満たされた。その方のおかげでまた、大地は穀物で、木々は果実で、蔦は葡萄で飾られる。そうして、その方のみ手によって、人は誕生しました。さらには、その方の寛大さによって、すべての造化はすすんで、その方が創造した人間に対して奉仕するのです」¹⁴⁾

しかし、この王妃の熱心な説得にもかかわらず、王の心は信仰には向かわない。信心深い王妃は王子の洗礼を済ませたが、インゴメールと名付けたその赤子は白い襁褓の中で死んでしまい、「襁褓はそのまま葬衣となってしまった」。クロヴィスはクロチルドを容赦なく責め

14) 同上 pp. 117-118

立てたが、クロチルドはそれに対して、「私はすべての造物主である、全能の神に感謝をささげます。なぜなら、神は私をまったくつまらないものとは判断されなかった。私の胎内に宿った子をその王国に迎え入れてくださったのだから、私の心は悲しみに打ちのめされてはいません。というのも、わが子は神の眼差しのもとで育つために白い襦袢のままこの世から呼び出されたのですから」といって、神に対する絶対的な帰依を姿勢を示す。

そんなことがあって、しばらく経ち、彼女はまた男子を生み、洗礼を受けさせ、クロドミールと名付けた。そして、この子が病気になると、王は、「この子にも、この子の兄に訪れた運命がまた訪れよう。お前のキリストの名の下で洗礼をして、すぐにでも死んでしまうだろう」と呪いのようなことばを掛ける。

しかし、母親の敬虔な祈りによって、この子は神の命のもとで快復することができた。

五、クロヴィスの改宗

クロヴィスがカトリックに改宗したのは、敬虔な妻のクロティルドの説得によってではない。アルマン族との戦争において、フランク軍は壊滅の危機に立たされた。そのとき、クロヴィスは空を仰いで、涙を流しながら、叫んだという。

「ああ、イエス・キリストよ。クロチルドが生きた神の子であるというあなた、悩める者に救いを与え、懇願する者に勝利をもたらすと人がいうあなたに、私は懇願いたします。どうかご助力によって勝利を下されんことを。もしあなたがこの敵に対する勝利をくださり、そしてまた、人びとがあなたの名前に帰する奇跡の力が証明されるなら、私はあなたを信じ、あなたの名前において洗礼を受けましょう。私は、実のところ、私の神々に救いを求めましたが、しかし、今までで見るところ、私を援けてくれようとしな。彼らには櫃はなんら力が備わっていないと信じざるを得ない。自己への奉仕者を救いにやって来ようとはしないのだから。今、私が加護を求めるのはあなたです。私が敵から引き離されるように信じたいのはあなたです」¹⁵⁾

すると、アラマン族は背を向けて、退却を始めたのである。

このことが契機になって、クロヴィスはカトリックに改宗することになる。『日本書紀』は、廃仏派の物部守屋との戦で劣勢に立たされた崇仏派の聖徳太子が、四天王の像を彫って頭に刺して、この戦に勝つことができたなら、四天王のために寺を建てようと願を立てたことにより、戦に勝ったのだと語る。戦勝を祈願したという点で一致する。戦勝の向こうに平和があるとしても、宗教は必ずしも平和を目的とはしない。

いずれにしろ、クロヴィスはカトリックへの入信を決心した。王一人が決心したところ

15) 同上 p. 119

で、その旗下の三千の兵士たちがどうするか、危惧があったものの、三千の兵士たちも、クロヴィスが語りかけようとした矢先に、死すべき神々を棄てることに同意した。「神の力」がすでに働いたのである。

ランスにおいて、聖レミのもとでクロヴィスの洗礼が行われる。

「この話はさっそく司教にもたらされ、司教は大きな喜びに満たされて、沐浴場を用意した。その場所は色彩豊かな幕でおおわれ、教会は白いカーテンで飾られた。洗礼堂は整えられ、香の匂いが立ち込め、芳しい大蠟燭があかあかと燃えていた。洗礼堂いっぱいには神聖な匂いが立ち込め、神が人びとを恩寵で満たしたので、人びとは天国の香りの中に連れて来られたものと信じた。最初に司教から洗礼を受けることを望んだのは王であった。新たなコンスタンティヌスである彼は前に進み出て、沐浴場に向かい、古いレプラの病から癒され、清らかな水でかつての古く穢れたしみを消し去ろうとしたのである。そこに彼が入ると、聖なる神は厳かな声で彼を呼び止めて、いった。

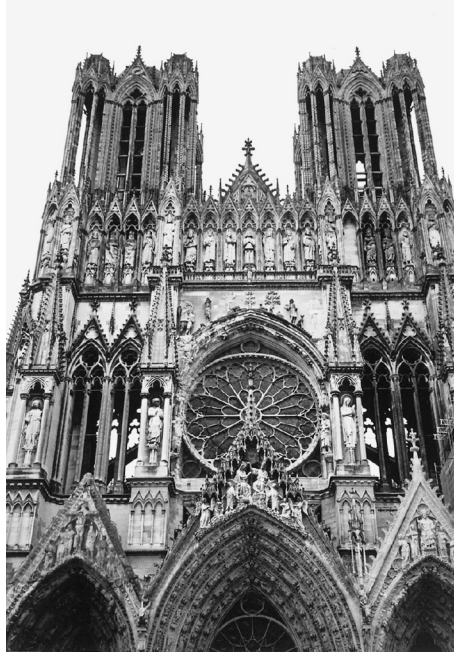
『ゆっくりと頭を下げよ、シカンブルよ。汝がこれまで燃やしたものを敬い、敬ったものを燃やさない』

聖レミはすぐれた学識の司教であり、特に修辞学に優れていたが、その聖性においても抜きん出っていて、奇跡を起こすことにおいて、シルベストルに匹敵するほどであった。今日においても彼の伝記は残っていて、そこには彼が死者を蘇らせたことが語られている。こうして、王は三位一体において全能である神に告解をして、父と子と聖霊のみ名のもとで洗礼を受け、十字のみ印とともに聖油を塗付されたのである。クロヴィスの軍の三千以上の者たちも同じように洗礼を受けた」¹⁶⁾

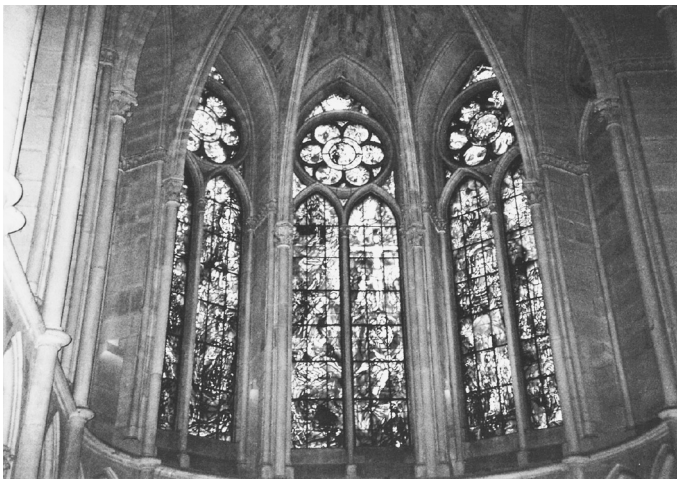
このとき、王に注ぐべき聖油がなかった。すると、一羽の鳩がくちばしに聖油の入ったガラスの小瓶を加えて空から舞い降りてきて、聖レミはその聖油をクロヴィスに注いだとされる。このクロヴィスのランスの聖堂での洗礼にちなんで、中世を通じて、フランス歴代の王たちの戴冠式はランスで行われ、そして鳩のもたらした聖油でもって聖別されるしきたりになっていた。1429年、ジャンヌ・ダルクはシャルルVII世をランスに連れていき、戴冠式を行わせることによって、正統の王にすることに躍起となったのである（写真6）（写真7）。

フランスはカトリック教会の「長女」だといわれる。ローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ教会を訪れたとき、コンスタンティヌス帝がサン・ピエトロに先立って建てたこのローマでもっとも由緒のある古い教会の参事会会員としてフランス大統領が名前を連ねていることに驚いたことがある。その起源はアンリIV世のときのものであり、メロヴィング朝までさかのぼることではないし、ポンピドー、ミッテランなどは参事会会員となること

16) 同上 pp. 120-121



(写真6 ランスのキャテドラル)



(写真7 同 シャガールのステンドグラス)

を拒否したらしいが、現在のマクロンはこの教会の参事会会員たることを受け入れているようである。クロヴィス個人の洗礼はカトリック国としてのフランスという国家の誕生を意味し、また西ヨーロッパ世界に大きな影響を及ぼしたことを考えれば、インターナショナルな出来事としての性格をもっている。そのきっかけがクロチルドという女性の敬虔な精神性であり、子どもの洗礼をきっかけにして、さらに戦争への勝利への強い祈願をきっかけにしていることは明記しておいていい。カトリックの中には脈々と母性信仰とっていいものが受

け継がれていることは、キリスト磔刑像と並んで聖母子像が多くみられることを考えても否定のしようがないし、それは人間の掛け替えのない無私の愛情を示しているものとして美しく至高のものだといってよい。しかし、キリスト教が特に好戦的であるというのではないとしても、戦争については深く考えさせられる。先に上げたサン・マルタンは軍人の風貌をもち、聖王ルイにしても、その断食や徳行などに疑問の余地はないものの、二度の十字軍への積極的な参加が聖別の理由になっているのであろう。

六、「教会」ということ

キリスト教を受容することによって何が起こったか、あるいは仏教を受容することによって、何が起こったか、と考える。どちらにおいても人びとの内面に向けられる意識の変化を一応はあげることができる。しかし、そのことについてここで考察しようとは思わない。日本に「文明」というべきものがあるのかをいうことはできないが、西洋にはローマから受け継いだ普遍性をもった確固とした「文明」があるかに思われる。ヘーゲルの観念的な歴史哲学よりも説得力を感じる、福沢諭吉の『文明論之概略』にも大きな影響を与えたフランソワ・ギゾー『ヨーロッパ文明史』は、ローマは崩壊していくものの、「都市制度」を残し、その慣習、その規則、その典範、すなわち自由の原理を残し、さらに全体的な国内法則、専制的権力、神聖なる尊厳、皇帝の権力という観念、すなわち秩序と隷従の原理を残したとする。そして、もう一つの原理がある。

「しかし、諸君、これと同時にローマの社会のうちには、まったく別の原理に基き、別の感情に鼓舞せられ、かつまた近代ヨーロッパ文明にまったく別の性質の諸要素をもたらすべき、はなはだ異なった一つの社会が形成されておりました。すなわちそれはキリスト教会のことであります。わたくしはキリスト教会といて、キリスト教とは申しません。四世紀末および五世紀初頭には、キリスト教はもはやたんに個人的信仰ではなかったのであって、一つの制度でありました。それは組織されておりました。すなわち自己の政府、聖職社団、聖職者の種々の職務に応じた一定の階級制度、収入、独立の活動手段、大社会に適合しうる集合点、地方的、国民的、全体的教議会、社会問題を共通に取扱う慣習をもっておりました。一言でいえば、この時期において、キリスト教はたんに宗教ではなく、教会でありました」¹⁷⁾

少し気になるので、原文を次に引いてみる。

Mais, Messieurs, en même temps s' était formée dans le sein de la société romaine une société bien différente, fondée sur de tout autres principes, animée d'autres sentiments, et qui

17) フランソワ・ギゾー『ヨーロッパ文明史』みすず書房、1987, pp. 33-34

devait apporter a la civilisation européenne modern des éléments d'une bien autre nature: je veux parler de l'Église chrétienne. Je dis l'Église chrétienne, et non pas le christianisme. A la fin du IV^e siècle et au commencement du V^e siècle, le christianisme n'était plus simplement une croyance individuelle; c'était une institution; il avait son gouvernement, un clergé, une hiérarchie déterminée pour des différentes fonctions du clergé, des revenus, des moyens d'action indépendants, des points de ralliement qui peuvent convenir a une grande société, des conciles provinciaux, nationaux, En un mot, a cette époque, le christianisme n'était pas seulement une religion, c'était une Église¹⁸⁾.

自由の原理、秩序と隷属の原理とは全く別の原理に基いた、「はなはだ異なった社会 (une société bien différente)」があり、それは「キリスト教会 (l'Église chrétienne)」なのだという。「キリスト教 (christianisme)」はたんなる「宗教 (religion)」ではなく、大文字の「教会 (une Église)」なのだという。そして、さらに続けている。

「わたくしは、四世紀末および五世紀初頭においてキリスト教を救ったのはキリスト教会であると断定しても、いい過ぎではないと思います。帝国の内部解体に対し、野蛮性に対し力強く身を守り、夷狄を征服し、ローマの世界と夷狄の世界との文明の紐帯、手段、根源となったものは、制度と長官と権力とを伴った教会なのであります」¹⁹⁾

(Je ne crois pas trop dire en affirmant qu'à la fin du IV^e et au commencement du V^e siècle, c'est l'Église chrétienne qui a sauvé le christianisme; c'est l'Église avec ses institutions, ses magistrats, son pouvoir, qui s'est défendue vigoureusement contre la dissolution intérieure de l'Empire, contre la barbarie, qui a conquis les Barbares, qui est devenue le lien, le moyen, le principe de civilisation entre le monde romain et le monde barbare.)²⁰⁾

「教会」、ここで大文字で書かれる l'Église は日本の仏教にはなかったものである。この「制度と長官と権力をもった教会」こそが「野蛮性 barbarie」に抗して、「野蛮人たち Barbaries」を征服したとする。フランク族が「教会」を飲み込んだのではなく、「教会」こそがクロヴィスを、そしてフランク族を飲み込んだという認識をギゾーはもっているようである。『ヨーロッパ文明史』は、1928年にソルボンヌ大学において行った講義をもとにするといい、七月革命(1830)以前のものということになるが、ギゾーはオルレアン家のルイ・フィリップの七月王制の末期には首相を務め、政治家としての無能が二月革命(1848)をもたらしたとして解任された人である。蛇足であるが、私の娘がパリの公立小学校に通ってい

18) François Guizot, *Histoire de la civilisation en Europe*, Hachette, 1985, p. 84

19) 前掲『ヨーロッパ文明史』p. 34

20) 前掲 *Histoire de la civilisation en Europe*, p. 84

たときの担任の女性の姓が d'Orléans であった。いたって庶民的な雰囲気を書わせた方であったが、姓を聞いて驚いたものであった。「共和国」であることの意味は深い。『ヨーロッパ文明史』第6版の序文（1853）には、ギゾーの次のようなことばがある。

「わたくしは、フランスが精神および社会の救済のために、キリスト教に復帰しなければならぬと確信し、かつキリスト教に復帰する場合は依然としてカトリックたるべきことを確信するものである。フランスがこの道に歩みを進めることを妨げるべき言動は一切これを慎むであろう」

カトリック教会が優先する。その大司教によって王は「聖別 *sacre*」される。それでは教会と王はどのような関係になるのであろうか。

ジャック・ル・ゴフは、フランス王は戴冠式において、ランスの大司教によって聖油を頭に、胸に、肩に、腕に注がれ、その後、身体すべてが王を表現するものとなるといい、次のように王の「聖別 *sacre*」の意味を述べている。

「この超自然的な力を付与され、王はそれ以降、神（Dieu）と自分が治める民との間の聖別された仲介者となる。彼を通して、つまり塗油を受けた彼の身体を通して、神の保護、神からの靈感がもたらされる。彼は、神と自分が治める民との間のハイフンであり、その死に至るまで、王国とその人民とに、現世における守護のみならず、とりわけ来世における救済についても、神の助けを保証する」²¹⁾

さらに、この戴冠式において、王は誓約を行うが、その儀式の進行の過程で、教会と王の関係に逆転が起これと、ジャック・ル・ゴフは指摘している。

「実際、これらの誓約の中において、そして聖別のさいの全般において、王と教会 l'Église との間にある協約が締結されるのであり、教会はここではみずからと同時に自身がその代表であるとする人民の立場でふるまっていることになる。「1250年の儀典書 *ordo*」の手稿本を飾る細密画は、聖別する者（*consécrateur*）が聖別される者（*consacré*）よりも上位にあるという、聖職者と王の間にそもそも前提とされている不平等関係をきちんと尊重しようとしている気遣いをよく表しているが、儀式の最後には、王が聖職者に対して上位に立つに至る。大司教が塗油され戴冠して王座に座る王に対しておこなう平和の接吻は（おそらく臣従礼の接吻も）、塗油され戴冠した王、すなわち「聖化された」王の「聖なるものへの変容」を象徴するものであろう」²²⁾

王は大司教よりも、そして「教会」よりも上位のものになるというのである。しかし、フ

21) Jacques Le Goff, *Saint Louis*, Gallimard, 1996, pp. 951-952

22) 同上 p. 954

ランス王は「祭祀王 *roi prêtre*」にはならないとも、ジャック・ル・ゴフは留保する。聖別の最中もその後も、王は俗人のままであるという。レジスタン運動の中でナチに殺されたマール・ブロックは、その『癒しの王—特にフランスとイギリスにおいて王の力に付与された超自然的性格についての研究—』という大部の書物の中で、「瘰癧 *écrouelles*」の症状を手で触れるだけで治癒させるフランス王とイギリス王の霊力について述べたが、ジャック・ル・ゴフはその起源をブロックほどには遡らせず、聖王ルイの時代あたりに求めている。世俗の権力と聖なる権力とは危うい均衡を保ちながら、不即不離の関係を保ちつづけることになる。

（この論文は桃山学院大学の共同研究プロジェクト「17連260 大学教育における南近畿の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究」の一環として、執筆者がプロジェクトの開始する前年度のフランス滞在での研究成果の一部を比較研究の立場から取りまとめたものである。南近畿をフィールドとする研究成果についても近々発表する予定である）

（2020年3月4日受理）

23) Marc Bloch, *Les rois thaumaturges—Étude sur le caractère surnaturel attribué à la puissance royale particulièrement en France et en Angleterre—*』（初版は1924年、参考にしたのは Gallimard 1983）

Southern Osaka: The Cradle of Japanese Buddhism IV

UMEYAMA Hideyuki

Continuing to study how Buddhism was accepted in ancient Japan, I spent the year of 2015 on sabbatical in Paris. The series of terrorist incidents that occurred in November of that year forced me to ponder the clash of civilizations and religions. In Paris I was a guest academic fellow of *College de France*, whose ethos is “*docet omnia* (teaches all),” so it was a very convenient circumstance to think about the conflicts and symbioses of civilizations (and of religions). There, Hebraists, Semitists, Buddhists, and Biblicists could be seen having lunch together in the university cafeteria, and holding peaceful discussions in the corridors. The building of *College* faces the rue *Clovis*. Going up that street, we meet the rue *Clotilde*. At the place where those two streets intersect, there once was the *Abbaye de Ste. Geneviève*. King Clovis, Queen Clotilde, and Saint Geneviève complete the three big names of people who contributed to the acceptance of Christianity in France and the founding of Catholic France.

The field of comparative studies is likely to offer a new and valid perspective from which to consider the theme that I have been concerned with for many years. So, through reviewing Former President François Hollande’s discourse at the ceremony of homage to the Victims of 13 November 2015, and reading Gregoire de Tour’s “History of the Franks”, this research paper will explore how the “barbarous” people became civilized through accepting the highly dogmatical and catechized religion.